



先生のための美術鑑賞講座

「みる」からはじまる、アートとコミュニケーション

概要

子どもたちの初めての美術館体験は、学校単位の来館であることが多い。現状では、館職員による、子どもたちへ向けたマナーの確認や美術館紹介、限られた時間内での作品鑑賞にとどまっている。先生たちが継続して美術館を授業で活用するために、先生たち自身の手で美術館の学習を实践できるよう、教員のスキルアップを目的として研修会を実施した。

基本情報

2018年
2月20日(火) 13:30~16:00

対象 富山県内の小・中・高・特別支援学校の教諭
参加者数 22名
会場 ホール

講師紹介

だて たかひろ
伊達隆洋さん

京都造形芸術大学アートプロデュース学科学科長、アート・コミュニケーションセンター研究員。人間科学・臨床心理学を専門領域とし、他者との対話が人にもたらす変化について研究している。全国各地の美術館や学校で鑑賞教育についての研修会を多数実施し、教鞭を執る京都造形芸術大学アートプロデュース学科では、コミュニケーションを介した作品鑑賞「ACOP(Art Communication Program)」の研究・実践をしている。

【ACOP】について

ACOP(エイコップ/Art Communication Program)とは、「みる・考える・話す・聴く」の4つを基本とした対話型鑑賞プログラム。美術史だけに偏らず、鑑賞者同士のコミュニケーションを通して美術作品を読み解いていく鑑賞方法を提唱する。学校教育における美術科の鑑賞教育をはじめ、教科横断でのアクティブラーニング型授業、美術・博物館での教育普及、企業における人材育成や医療従事者へのトレーニングなど幅広く活用されている。

内容紹介



この研修会では、人が普段から、いかに“経験”に無意識的に囚われているか、ワークを通して先生達に再認識してもらい、児童生徒に知識を与えるだけでなく、時に教師が聞き手となることの重要性を伝えた。

作品はモノ、アートはコト。作品=アートではなく、作品を見る人がいて、見て生まれた発想や問いなど、「作品を起点として見ている人に起こる出来事がアートである」との前置きから始まった。

講師の伊達さんは、会場であるホールの壁面にスライドを使って、「みる」「かんがえる」「はなす」「きく」を巡る中で、どういことが人間に起こるのか、それらの認知の仕方を具体的に明らかにしていった。例えば、誰もが一度は目にしたことのある隠し絵「妻と義母」から、2つの図像を同時に認識できない見ることの不自由さを示し、他にも画面の中心が消失点になっている線路の写真から、平面図に遠近感を感じられるのは、見る経験を積み重ねているからだ、と話された。このように、様々なスライドから「見る」ことを学んだ後に、伊達さんをファシリテーターとして、先生達が鑑賞者になり対話型鑑賞を行った。使用された画像は、男性の首像の写真。最初は周りの様子を伺い、遠慮がちに発言していた先生達も、対話を重ねていくと和んできた。像の男性がどんな性格で、何を考え、どんな職業なのか、細部の特徴や顔の表情、素材の様子

から推察していった。伊達さんは、途中で「カラカラ帝」だと言い当てた先生の発言から、ローマ帝国の暴君を模った像であることを明かし、観察による情報と、知識をバランスよく取り入れた鑑賞体験となった。

先生達のアンケートには「対話型鑑賞の授業をする自信が無かったが、やってみようと思った」「鑑賞に対する漠然としたイメージがクリアになった」など、授業に取り入れたいとの意見も多く見受けられ、本研修会は有意義なものとなった。(瀧川)